

## アーティスト片山真理が語る、社会が考える普遍的概念とは何か？

ロンドンのテートモダンでの長きに渡る展示に加え、V&Aのパラソル財団女性写真家プロジェクトによりアジアの女性作家として初めて委嘱された片山真理。国際舞台でも話題沸騰の表現者に迫る。『エル・ジャポン』11月号より。

BY MARINA NAGANO AND ASUKA OCHI | 公開日:2025/10/11

### 社会が考える、普遍的概念とは何か。その違和感から塗り替えていく創造



"tree of life #012" commissioned by the V&A Parasol Foundation Women in Photography project with support from the Parasol Foundation Trust. ©Mari Katayama, courtesy of Mari Katayama Studio and Galerie Suzanne Tarasieve, Paris

まるでまばゆい光を放つ千手観音像のように、神々しく美しく、すべてが重なり合うように、森に溶け込んでいく——。作品集『Synthesis』で発表したばかりのセルフポートレートが映し出すのは、紛れのないこの作家の現在地だ。自らの身体と、それを模した手縫いのオブジェなどを組み合わせた写真作品やインスタレーションで知られる片山真理。自身と他者や社会、自然物と人工物などの間に存在する既存の境界線を揺さぶり、模索する作品は、国内外で高い評価を得ている。

「裁縫をする家庭に育ち、幼少期から祖父に連れられて行った美術館の常設展などで近代アートやペインティングに触れていたので、何かをつくるということは常に身近にありましたね。ただ、自分がやっていることをアートと言えるようになるのには、かなり時間がかかりました」



"tree of life #013" commissioned by the V&A Parasel Foundation Women in Photography project with support from the Parasel Foundation Trust. ©Mari Katayama, courtesy of Mari Katayama Studio and Galerie Suzanne Tarasieve, Paris

商業高校から、女子大文学部の美学美術史学科で学んだ後、東京藝術大学大学院へ。修了制作で発表した「ハイヒール・プロジェクト」は、創作の原点的衝動を生み出した象徴的な作品といっている。「大学院在学中、ジャズバーで歌う仕事をしていて、お客さまに『女なのにハイヒールを履かないで接客するなんて失礼だ』と言われたことがあって。その方は、私がいつもロングドレスで義足を隠していたので、履きたくても履けないことを知らなかったのですが、勝手に悔しくなって、じゃあ履いてやると。世界に存在する一番高いヒールが履ける義足の部品を探すところから、ハイヒールでステージに立つというプロジェクトが始まりました」。

**“最新作には、未来の世界を諦めないという、私なりの希望と答えを込めています”**

ハイヒールを履くという開かれた選択肢をつくりたい。衝動からスタートした活動は、さまざまな当事者との関わりによって広がり、2022年には、イタリアのシューズブランド、セルジオ ロッシとのプロジェクトへと展開していく。それは、片山個人すら離れた、ひとつの到達点となった。一方で、『Synthesis』への道のりとなるここ5～6年で、作品への姿勢も大きく変化したという。



片山真理 1987年、群馬県出身。2005年、群馬青年ビエンナーレ奨励賞から、今年で活動20周年。ロンドンのテートモダン、V&Aでも展示中。最新の作品集『Synthesis』が発売。

「きっかけは大きく2つあって。ひとつは娘を出産したとき、危険な裁縫道具をすべて片付けたことでした。そのときに残った道具がカメラ。ちょうど写真美術館の展示でフィルムでの表現を提案してもらったこともあり、ラボのプリンターさんとやりとりしながら、フィルムと紙のポテンシャルを100%引き出せる撮影をしたいと、5年がかりで本格的にカメラの技術を勉強しました。そこから、自分は写真を作品にしていると自信を持って言えるようになったと思います。もうひとつは、娘を抱っこしていて転んでしまったことをきっかけに、それまでのアナログな義足を、電子制御のものに替えたことです。できる限り家にいて足を休めたかったのが、アクティブに外に出られるようになり、プロジェクトも大きく成長した。そうして他者や外部によって作品が変わっていく楽しさを柔軟に感じられるようになりました。人と生きるのには、すごく大変なことも、その分、幸せなこともたくさんある。『Synthesis』には、彼らとの未来の世界を諦めないという、私なりの希望と答えを込めています」